



長崎から大阪に着いたカメラ小僧、マツシマススム。  
名誉ある「第15回太陽賞」を受賞。  
現在も現役、写真は人生のすべてと言い切る。  
次女も1992年、写専卒。

マツシマ ススム × 安子 × 栄子 × 逸子

UP! SPECIAL HAPPY is FAMILY vol.34

# UP! SPECIAL HAPPY is FAMILY



娘と並んで写真をとるのは  
何年ぶりだろう。

いつもは写真を撮る側なので、撮られるのは少し照れるね。  
お父さん、もう少しアゴを引いてと娘が言うとお父さんの鼻の下  
が長くなった。

私(マツシマススム・71)が長崎から写専の夜間コースに入学したのは、1964年の春であった。大阪の賑やかさにも驚いたが、写専の学生数が1,500名もいたことは想像外であった。入学式は大阪市立美術館で行われた。入学式の記念写真には、どこに写っているかわからない豆粒だった。写専を卒業して、1978年に第15回「太陽賞」を受賞した。

当時のスターであった東松照明氏に憧れていた、彼のような写真が撮れたらといつも思っていた。14年間、琵琶湖を撮り続けていて、ある時、穏やかな水平線の上方の太陽に、ひとつの大きな雲がぼつかりと重なり、幻想的な風景が現れた。これは「チャンスだ」。心の高鳴りを抑さえつつシャッターを切った。その写真が選ばれた。毎日のように違う表情を見せてくれる琵琶湖の景色が今も好きである。

1966年に妻、安子(72)とD.Pも含めた写真店をオープンさせた。時代がよかったのか店は繁盛した。大きくなっていく店の跡継ぎを考えて娘に写真を勉強しなさいといったが、長女(栄子・47)は嫌がり、次女(逸子・44)が写専に1992年に入学することとなる。彼女は国際ビジュアルデザイン学科(現在は廃科)に籍を置き写真だけでなくデザイン、映像などを学ぶ。やがて卒業後は東京に仕事場を移し食品メーカーの企画、現在はマーケティングを担当している。

「作品の写真は撮ってはいませんが、会社の行事ごと、簡単な見本パッケージの写真は撮っています。それと、写専時代の仲間たちとは今も連絡を取り合っています」とのこと。

長女は現在横浜に住んでいて、次女は東京に住んでいる。年に2回、私たち夫婦は東京を訪問する。写真の教室を5つほど持っていて休む日はないが、毎年2月には流水を撮影するために北海道に行く。極寒の北の果てには大自然のロマンがある。風が吹き、吹雪となり、氷が流れる。そこに生息する植物、動物に「人間も自然の一部なんだよ」と教えられる。冬に雄シカは人前には姿を見せないが、今年は30頭も現れた。自然界では時折、不思議なことが起こる。ここが醍醐味である。私の教室には96歳の方がいる。手もかじかむ北海道での撮影をする甲斐にしている。あの人の情熱に触れるたびに、まだまだ写真を撮り続けなければと思う。

九州男児でやや頑固でせっかちの部分もあるが、長崎から大阪に来た時、ひとクラス40名が2クラスで教室満杯の時の胸いっぱい希望と興奮は今も忘れていません。今もって私はカメラ小僧です。半ば強引に入学させた娘が「写専に入ってよかった」と言ってくれるのは、なによりも幸せです。(は)